

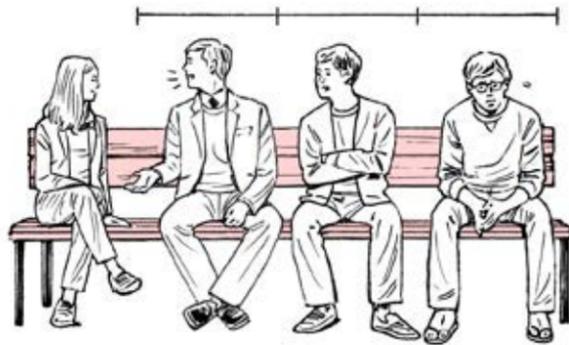
第一回未来洞察ワークショップ

AIはどう社会に普及するか？

2040年までの未来ロードマップ

2018

若者は3種類に分類できる



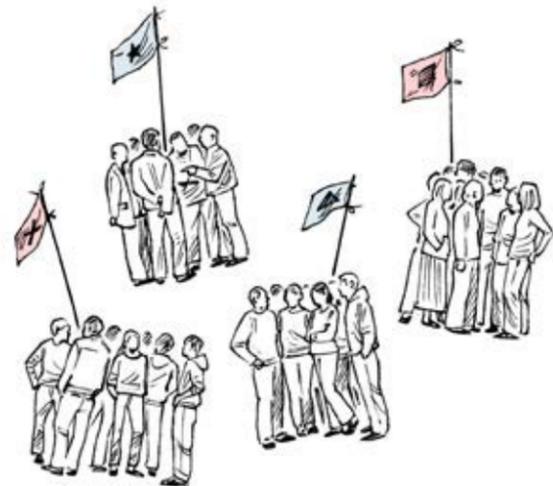
- 若者はコミュニケーション・エリート、中間層、コミュニケーション困難層の3つに分かれ、その間の断絶が顕著になる。
- 若者の年齢による横のつながりが弱くなり、コミュニケーションにおける個人主義化が進行する。
- シェアリングエコノミーが充実し、ライフスタイルは、すべてネットワーク上で管理する「クラウド化」、もしくは貯蓄・所有を行わない「フロー化」が進む。
- 学校が唯一のコミュニティハブとして機能するようになる。
- 断絶を感じる人々向けのビジネスが、「知識」から「癒し」へシフトする。

2020

裕福な高齢者が
“あしながおじさん”
する

- 極端な核家族化の結果、お金の余った裕福な高齢者が血縁に関係なく若者を経済的に支援する＝あしながおじさんとして社会に影響を与える。
- 寿命が伸長し、若く生きる時間よりも、老いて生きる時間が長くなり、多くの人が「老後のために生きる」人生を送るようになる。
- スマートデバイスのインターフェイスがより簡易なものになり、AIのユニバーサルなサービス化が進む。
- 商品やサービスを自ら探すのではなく、AIによって自動的にマッチングが行われる「サービスマッチング社会」が到来する。

2020

国の在り方が
変わる

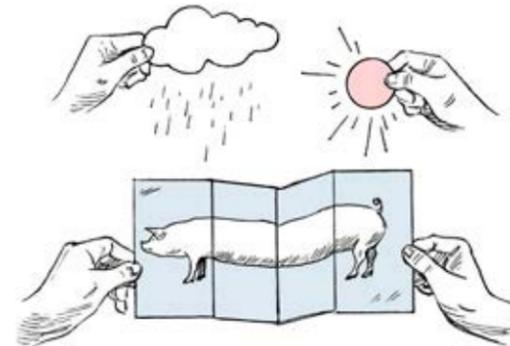
- 年金制度の破綻や医療費の自己負担の増加に端を発して、これまで行政が国民に提供してきた福祉が限定的になる。結果として、国家が市民に与える影響力が弱まっていく。
- 国家を代替するような、多様なコミュニティが形成。既存の国家から独立する機運が高まる。
- 既存の国家システムとの間に摩擦が起きる。また、その摩擦、情報のアービトラジーを利用したビジネスが創造される。

2030

AIが“モザイク社会”を
形成する

- 産業社会生活資本にAIが導入され、AIに決断「任せる」人と、自分自身の決断に「こだわる」人が社会の中で混在し、「モザイク化」していく。
- 現実世界のビッグデータを解析し、意味あるデータを抽出して活用する技術が飛躍的に向上する。サイバー世界と、フィジカルな現実世界が緊密に連携する、社会の「サイバーフィジカル」化が進行する。

2035

人間が自然を自由に操作できる
ようになる

- 農産物や畜産物などの遺伝子組み換え技術が進み、またその育成環境も人工的に構築されるなど、自然そのものが人為的につくられるものになる。
- ある種の気象操作などが可能になるなど、自然のコントロールによって新たに持続可能なエネルギー資源を手に入れる。
- 人為的に食糧をつくりだす技術が確立し、普及。食品革命が起きる。

2040

バーチャルおよび
リアルの世界で
民族大移動が
起きる

- 地球の気候変動によってニューノース時代（高緯度地域の繁栄）が到来。リアルの世界で民族単位、または個人間での移住が活性化する。
- 同時にクラウド上のバーチャル国家も繁栄する。それらが持続的社會変革を牽引する。
- 情報技術の発展によるテロや戦争、またはバイオテクノロジーの過剰な進展による未知の事故や病気といった想定外の負の影響がもたらされる。世界規模のリスクが増大し、それらを活用していく社会が誕生する。

AI 技術は モザイク型に 普及する

未来洞察の手法を研究・実践する鷲田祐一教授らは、HITEプロジェクトにおいて、有識者を招いてAIやIoTなどの情報技術が普及した未来を予測する「第一回未来洞察ワークショップ」を開催した。その結果、2025～30年頃にAIやIoTの「モザイク型普及」が起きるといふ未来シナリオが描き出された。その背景には、社会格差が進み、国家による福祉サービスが弱まるという予測がある。結果として、「AIが人間の仕事を奪う」、「社会が一斉にIoT化する」といった、昨今よく話題となる画一的な変化が起こるのではなく、テクノロジーの浸透は社会の中でかなりの「ばらつき」を持って進むというシナリオが生まれた。このばらつき現象を鷲田教授らは「社会のモザイク化」と名付けたが、その問題を見越した上で、今後のテクノロジー発展とどう向き合うかがこれからの大きな課題となるだろう。あらゆる未来を想像し、柔軟に備えをしていく思考のトレーニングが「未来洞察」なのだ。

*同ワークショップの結果内容は『マーケティングジャーナル Vol.37 No.1(2017)』にも掲載されている。